

●江田船山古墳の銀象嵌大刀

新井 宏

江田船山古墳は、熊本県玉名郡和水町にある清原古墳群最大の後期前方後円墳で、墳長六二メートル、七十五文字を銀象嵌で記した大刀が出土したことで知られ、国の史跡に指定されている。平成十年二月、熊本工業大学の主催で、市民や学生を対象に開かれた「古韓尺の講演会」に招かれた際に、妻と訪れたことがある。もう日没に差し掛かった頃で、あわただしい見学であったが、九州後期の古墳の雰囲気味わい大満足であった。もし詳細な発掘が行われれば、この古墳も古韓尺で造られた可能性があるとの印象であった。

しかし、その江田船山古墳が、その後、二回にわたって私の「史遊生活」に登場するとは思っても見なかった。人生すべて、芋づるのようにつながっている。今回は、その因縁を紹介しようと思うが、話を簡単にするために、結論から先に書く。いずれも銀象嵌の大刀の銘文に絡んでいる。

まず第一は、銘文中に見られる「𠄎」の文字が永らく「国字」とされていたが、埼玉県の稲荷山古墳の鉄剣にも二ヶ所あり、更に高句麗の広開土王碑にも二ヶ所あることを「発見」したので

ある。これによって、日本の漢字表記法の起源が朝鮮半島にあることが確実になった。
第二は、同じく銘文中にある「四尺廷刀」という記述と大刀の実長の関係から、一尺が二六・八センチと計算され、古韓尺と完全に一致したことである。私の提唱した古韓尺、私が最も待ち望んでいた古韓尺の直接的な検証資料の登場であった。

国字の弓は朝鮮半島起源

万葉仮名の弓

現代日本語と異なり、万葉時代の発音には、甲類と乙類があり、これに濁音を加えると単音だけでも八十六音もあった。これらの発音について、漢字を借りて表音したのが、いわゆる万葉仮名で、数えて見ると六百字ほどある。その当時は、清音と濁音の区別があいまいで、清濁に共用された漢字もあるけれど、おおよそ一音につき平均して七字ほど用いられていたことになる。しかも、少し時代が下がると漢字を訓読みしたものを、再び万葉仮名として利用している場合も二百字ほどある。その他に二音の漢字の万葉仮名もあり、大まかに言えば、万葉仮名としては千字ほど使われていたわけである。

その中で、唯一、国字と言われているのが「弓」という文字である。国字とは中国漢字を集大成した『康熙字典』にも見られない漢字で、日本で作られた漢字を意味し、多くの漢和辞典で「国字」と大書している。歴史的には推古朝から使われており、万葉集では、四千五百十四首の中に六百回ほど現れ、かなり多く使われた文字のひとつである。後世になっても助詞の通称に弓爾乎波キニハと使ったり、平安時代の蝦夷の首長の名前を阿弓流爲アキナガと表記している。

江田船山大刀の弓

ところで、この弓の文字が、江田船山古墳から出土した銀象嵌大刀の銘文七十五字の中に出ていたのである。まず、現在の標準的な釈文（東野治之案を基準）を示そう。次のようになってい

台天下獲ト一二爾大王世、奉事典曹人名无利弓、八月中、用大鉄釜 并四尺廷刀、八十練
九十振三寸上、好利刀、服此刀者長寿、子孫洋々得レ恩也、不失其所統、作刀者名伊太和、書
者張安也

この銀象嵌大刀が江田船山古墳から出土したのは明治六年であるが、本格的な銘文の釈読は、大正十一年になって後藤守一先生によって行われた。その時の冒頭部分

■■■■■■■■■■
一 太平世、奉 二 晋人名 一 弓

となっていて、太土の名前も不明であり、弓の部分も丁と読んでいた。

その後、昭和九年になって福山敏男先生が次のような有名な釈文を発表する。

治天下螻「□」爾大王世奉「典□」人名无「□」弓

ここに初めて、大王名が螻「□」爾であり、螻をタジヒと読み、多遲比璠齒別尊すなわち反正天皇に当てられた。それと同時に、典「人（典曹人）」の名が無「□」弓と釈読され、それが長らく定説となっていた。

稻荷山鉄剣の弓

状況が急変したのは、昭和五十三年に埼玉県稻荷山古墳出土の鉄剣の金象嵌銘百十五文字が釈読された時である。現在の標準的な釈文を示すと次の通りである。

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埜其兒多加利足尼其兒名弓己加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比（表）

其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支爾大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也（裏）

ここに、獲加多支爾大王と釈読された人物が「古事記」「日本書紀」に出てくる大長谷若建命・

大泊瀬幼武、すなわち雄略天皇とする説が有力になり、関連して、江田船山刀の螻「□」爾大王も獲「□」爾大王と読まれるようになった。そして杖刀人との対比で典曹人がきまり、无「□」弓も无利弓と釈読されるようになったのである。

いずれにせよ、多少の危うさはあるが江田船山鉄剣に弓の字が使われていたことが、ここに認知されたのである。

しかもそればかりではなかった。稻荷山鉄剣にも、上祖から八代の系譜を記す中で、三番目に弓己加利獲居、六番目に半弓比と二ヶ所にわたって弓が現れていた。いずれも、江田船山銀象嵌大刀と同じく人名である。万葉集の悲しい伝承の主人公、手見奈や蝦夷の阿弓流爲もテ音を含んでいることから見ると、古代の人名にテ音がつくのが多かったようである。いずれにせよ、両鉄刀剣の百九十字の中に、弓が二回も現れている。

ついでに言えば、稻荷山鉄剣の百十五文字は、鉄剣類の銘文としては、中国や朝鮮半島を含めても最多であり、これに江田船山大刀の七十五文字が続いている。古代日本人は意外にも、当時から文字による顕彰を好んでいたのかも知れない。そうであれば、ある程度、漢字は読めたはずである。

しかし、読めたとしても、古墳時代に弓のような国字の造字能力があったかとなると、極めて疑問である。千文字もある万葉仮名の中に、弓を除くと国字とされているものがひとつもないからである。そうすると、どこで造られた文字なのか。蓋然性の高いのは当然ながら朝鮮半島である。

広開土王碑の弓

弓が朝鮮半島にあるはずだと気付いたのは、平成十四年のことである。しかし、簡単な着想であるから、当然、どこかで誰かが、その事実を指摘していると考えて、手持ちの資料などを当たってみた。ところが、どこにも弓の使用について意見が述べられていないのである。

稲荷山鉄剣の場合で言えば、辛亥年が四十七年か否か、獲加多支箇大王や八代の系譜が誰に相当するかなどで議論があるものの、弓に注目した議論はなかった。もちろん、当時、私は韓国に滞在していたので十分な調査ができなかったから、おそらく見落としがあるのだろうと考えることにした。

しかし、韓国に滞在する利点を活かして、「広開土王碑文」を含めて、朝鮮半島の金石文や『三國史記』や『三國遺事』に弓が見出せるのではないかと期待し、あれこれと調査してみたが、何の手掛かりも得られなかった。

ところが平成十六年の年末になって、偶然「広開土王碑文」の拓本集を見ていて、そこに「幹弓利」と二ヶ所も弓が出ているのを発見したのである。ひとつは第一面の十行目、もうひとつは第三面の十四行目（最終行）である。あれほど調べていたのに、どうして見落とししていたのだろうか。

理由は簡単であった。通常、「広開土王碑文」として活字化されている「釈文」のほとんどが、この部分の弓を弓（榮禧、今西龍、前間恭作、木松保和、朴時亨など）と読んだり、氏（水谷悌二郎、

王健群、李亨求、武川幸男、盧泰敦など）と読んでいたのである。しかし拓本を忠実にみるならばであり、事実、三宅米吉や羅振玉は正しく弓としていた。私がそれに気付かなかっただけなのである。「大東急記念文庫双鉤本」の該当部分を示す。

周知のように、広開土王碑文については、李進熙氏が日本参謀本部の石灰塗布による改竄説を主張していた関係もあって、いろいろな拓本に基づいた、いろいろな釈文がある。その中では、改竄がなかった事を現地調査で証明した王健群氏の釈文が多く採られているが、ここでは弓を氏と書いている。

ところで、弓を弓と読むのは字形から領けるが、どうして氏となっていたのであろうか。それは、弓を氏の異字とする説がもととあったからである。低や低などの旁の「氏」が「弓」になることからの類推らしい。事実、万葉仮名として、弓と共に氏もテ音として使われている。王健

第一面の十行目



第二面の十四行目



『大東急記念文庫双鉤本』より

群氏は中国の学者であり、弓の字がないので、氏に直したのはある意味で当然かも知れないが、やはり原典に当たってみるのが、歴史学の原点だと再確認した。

いずれにせよ、江田船山大刀と稲荷山鉄剣に記された弓が朝鮮半島「大東急記念文庫双鉤本」から現れたのである。さあ、また新発見である。心が躍る。やはり、大刀や鉄剣の文字は朝鮮半島由来のものだったのである。

森浩一先生の先行紹介

しかし、こんな簡単なことが今まで見過ごされていたとはやはり思えない。冷却期間を置いて、その間に徹底的に調べてみよう。

そして、いきなり興奮が醒めてしまった。既に森浩一先生がまったく同じことを述べているではないか。しかも学術論文でもない一般市販本の『関東学をひらく』の「稲荷山古墳鉄剣銘」の項にさらりと……。その一部を引用してみよう。

弓は国字である。少なくともそのように解釈されている。そうだとすると、一九六八年に発掘され、その後、金象嵌の銘文のあることが判明した埼玉県稲荷山古墳鉄剣の弓が僕は重要だとおもう。(中略)

弓は、一般的に国字と言われている、本場の中国での使用例はなさそうである。中国にはないというものの、高句麗にはある。先に結論を言えば、高句麗で考案された漢字の応用文字であって、それが渡来人によって関東へ持ちこまれ、(中略)。

高句麗では、四一四年に建てられた好太王(広開土王)碑の碑文の二ヶ所にていでいる(中略)。拓本では、二ヶ所とも弓と読めるが、活字に直すときには氏の字に変えられていたため、弓の存在に気付かなかった人が多い(中略)。弓を氏に変えて活字にしていたのは、穀を谷にするのとどこか似ているように感じている。

要は、私の到達した結論と全く同じことが、私が問題に気付いた平成十四年には既に森浩一先生によって紹介されていたのである。

ただ、ひとつだけ異なるのは、何故か森浩一先生は江田船山鉄剣については全く触れていない。稲荷山鉄剣の事例だけでも十分と考えられたのかも知れないが、江田船山大刀の例が加わるならばるかに重みが増すように思うのであるが、それは大発見が霧散してしまったことによる負け惜しみかも知れない。

かくして、大発見の興奮から醒めてしまった。

ところが、ここに後日談が生まれる。私にとってやはり江田船山鉄剣は、幸運の女神であった。私のライフワークとも言えるべき古韓尺の証拠が、そこに宿っていたのである。しかも、その発見者は私自身でなく、東京国立博物館の研究者であった。それに気付いたのは、つい最近のことである。

二 古韓尺の実長を示す江田船山大刀

まぼろしの古韓尺

古韓尺……。もともと、そんな名前の尺度はなかった。命名者は私である。だからどうして

も古韓尺について語りたくなる。少し、寄り道になるのを許して頂きたい。

もう一昨年になるが、私は「理系の視点からみた考古学の論争点」という本を大和書房から出版した。幸いなことに、読売、日経、東京、産経などの書評欄に取り上げられ、また森浩一先生も紹介記事を書いて下さるなど、かなり評判になり、少ないながらも既に第二刷も出ている。どうも話題の中心は、第一章の鉛同位体比の解析から三角縁神獸鏡が魏鏡ではないことを論証した部分、あるいは、第二章の歴史民俗博物館の弥生開始年代五百年週上説を理系の立場から否定した部分に集中しているようであるが、私の主眼は第三章の「古墳築造にはどんな尺度が使われたか」にあった。すなわち古韓尺論である。

古墳がどのような「ものさし」で設計されたか。まことにロマンあるテーマであるが、「ひとつの古墳にひとつの尺度がある」と揶揄されるほどの百家争鳴の状態であった。その中で、私は古墳の計測値の解析研究だけでは、とても解決し得ない問題だと考えて、対象を、朝鮮半島を含めた古墳、古代宮殿、寺院にまで拡張、膨大な計測データを収集して解析した。その結果、一斉に浮かび上がったのが古韓尺である。長さは二六・八センチ前後になる。

その成果は、論文のほかに、平成四年に吉川弘文館から「まほろしの古代尺・高麗尺はなかった」として出した。これも朝日や読売新聞で紹介され、更に考古学の泰斗、坂詰秀一先生が読売新聞の平成四年上期の「私の一冊」に選んで下さったこともあり、かなり評判になった。したがって私としては大満足であった。

しかし、出版が終わってしまえば、段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎ

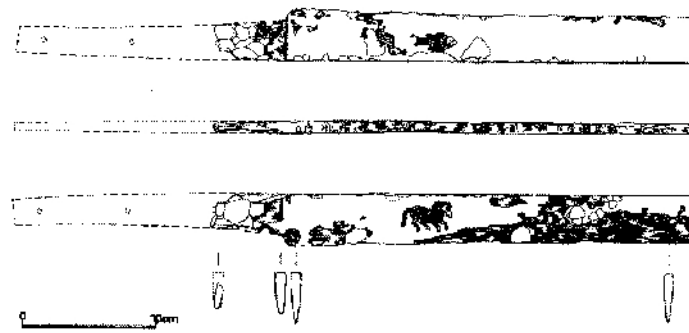
てしまった。いたるところに美しい誤解が満ちていた。そのことにはまず自分で気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。使ったデータがミスプリントだった場合もあった。晴れがましい本を開くのが怖いと思う日もやって来た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと白説を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

それと、もうひとつ理由があった。もっと専門家たちが注目してくれると思ったのに、総じて反応は冷ややかであった。たしかに、坂詰秀一先生や鈴木靖民先生などが賛意を表してくれたが、他は「アマチュアの説などにうっかり乗って怪我でもしたら」という雰囲気であった。正面から反論されることはなかったが、伝統的な方法、すなわち「無視」が横行していた。

汎東アジアの古韓尺へ

無視されないようにと考えて、歴史専門書の出版社、吉川弘文館から出したのに世の中は甘くなかった。発掘調査の結果が、古韓尺に良く合っているにもかかわらず、唐尺と高麗尺だけを検討している報告書が公的な研究所から出され続けた。もつとも、それに批判的な方からわざわざ連絡を頂くこともあったが……。

古韓尺が無視される最大の理由はアマチュアの説にあると感じていた。だから理屈で言えば、アマチュアを止めてプロになれば、この問題は解決する。そんな単純な考え方をするのが理系の視点なのかも知れないが、それにはどこかの大学院に入って、専門家のグループに入れてもらう



東京国立博物館 | 国宝銀象嵌銘大刀・保存修理報告書 | より一部

東京国立博物館の論理は極めて簡単である。前述のように、銘文の中には、この鉄剣の製作について、「用大鉄釜并四尺延刀」と書いてある。すなわち、この大刀の総長が四尺と明記されているのである。だから総長さえ判明すれば、あとは簡単に計算できる。ただし、残念なことにごの大刀は柄の一部分が欠けていて、残存長が九二センチであり、全長は分らない。ところが、東京国立博物館の研究によって柄の部分の復元が行われたのである。報告書から柄の部分の復元図を参考のために示しておく。

すなわち、柄に相当する部分の長さを十五センチと復元したのである。したがって総長は百七センチになりこれが四尺に相当するので、その一尺は二六・八センチと計算され、正確に古韓尺に一致するのである。しかも、この計算も東京国立博物館によって行われていた。もちろん、そこには私の古韓尺について言及されていたことは言うまでもない。知らぬは亭主ばかりであった。

古韓尺の直接証拠

一理系の視点からみた考古学の論争点^①を書いた時に、古韓尺の直接的な証拠として提示したのは、静岡県浜松市伊場遺跡出

のが一番である。日本でも良いが、韓国の大学院の方が面白そうだ。それなら、大学院の学生で行くより、教授で行ったらどうだろう。そして職場生活が一区切りついた平成十三年から韓国国立慶尚大学での招聘教授の生活を始めて、古韓尺の研究に没頭した。

その結果、古韓尺は私の期待を超えて、ついに朝鮮半島と日本の古代土地計量制度が同一であったという画期的な論証を得ることに結実し、更には、中国、朝鮮半島、日本の東アジア全般の土地制度の基礎として位置付けられる状況まで研究が進んだ。それらの研究は十件ほどの論文として、その都度、発表してきたが、それを総合的に紹介したのが、「理系の視点から見た考古学の論争点」の第三章なのである。

江戸船山大刀の古韓尺

長い寄り道になってしまったが、古韓尺の実長が二六・八センチほどになるという間接的な傍証は、実に数多く集まった。しかし、数行で書き表せる簡単な事実だけで、万人を納得させ得る資料となると、隔靴搔痒の感があった。そんな状況の中で、江戸船山大刀から、古韓尺の実長が二六・八センチになるといふ実にシンプルな結果が現れたのである。

いや、正確に言えば、平成五年には既に、その事実が東京国立博物館によって「国宝銀象嵌銘大刀江戸船山古墳出土保存修理報告書」に公表されていたのである。なんとなくかつだったのだから。平成五年といえば「まぼろしの古代尺」を出版した翌年で、なんとしても、古韓尺の実証資料を得たいと夢中になっていた頃である。

將軍塚の古韓尺による復元

項目	実測値 (m)	古韓尺	
		尺数	尺長
基壇辺長	32.5	120	27.1
一壇辺長	29.6	110	26.9
二壇辺長	26.7	100	26.7
三壇辺長	24.1	90	26.8
四壇辺長	21.5	80	26.9
五壇辺長	18.9	70	27.0
六壇辺長	16.1	60	26.8
七壇辺長	13.4	50	26.8
最上壇辺長	8.0	30	26.7
石室の縦横長	5.3	20	26.5

この地域は、高句麗が二世紀末から五世紀まで高句麗の首都として丸都城を置いたところで、付近には広開土王の陵墓と見られる將軍塚や大王陵がある。いずれも、築造設計が古韓尺によって行われている。

例えば、ピラミット状の石積古墳である將軍塚は、各辺や石室の長さが表のように、古韓尺の百二十尺から十尺刻みに造られている。六尺で一歩であるから、底辺の百二十尺は二十歩のことである。そればかりではない。將軍塚の陵域は九六メートルで古韓尺の六十歩である。また、大王陵は上部が崩壊しているが、底辺は六四メートル、陵域は三二〇メートルで、古韓尺の四十歩と二百歩である。

日本の超大型前方後出墳の場合も、古韓尺を基準にしているのがほとんどである。例えば墳長でいえば、仁徳陵古墳の四八六メートルは三百歩、景行陵、土師ニサンザイ、作山、仲津媛陵、箸墓の各古墳の二八八メートル前後は百八十歩、崇神陵、室宮山、仲哀陵の各古墳の二四〇メートル前後は百五十歩である。しかも初期の古墳とされている纏向石塚、纏向矢塚、東田大塚の各古墳も墳長が九六メートルで古韓尺の六十歩である。いかに三三メートルの倍数が多いことか。三三メートルは古韓尺の二十歩である。

江田船山古墳の墳長六二メートルも正確な発掘によれば、

土の「ものさし」である。これは断面形状が半円形の木棒に平均二六七ミリ間隔の刻みが記されたものである。この伊場遺跡出土材が「ものさし」的であることは確実であるが、機織などの定規として用いられたものかも知れない。そうであれば、百パーセントの証拠とはならない。

もうひとつの直接的な証拠として提示したのは、蔡邕銅籥尺と北周の后周玉尺である。いずれも実長が二六・八センチに近く、中国に実在した尺であるが、高句麗や鮮卑などの北方民族の尺、すなわち古韓尺が中国に入ってから残ったものというのが私の見解である。しかし、朝鮮半島や日本から出土したものではない点に難点があった。

その点では、江田船山古墳の銀象嵌大刀の例は、より直接的であり、私にとっては、それだけ貴重である。もう少し早く、東京国立博物館の報告に気付いていて、「理系の視点からみた考古学の論争点」の中で、それを紹介できていたなら、どんなにか良かったのと思うと、残念である。

三 広開土王碑と古韓尺

江田船山古墳が、以上の文字と古韓尺に密接な関係を持っていたように、広開土王碑も両者に深く関連している。

広開土王碑は好太王碑ともいわれ、北朝鮮と中国の国境、鴨緑江の中国側の吉林省集安にある。

六四メートルすなわち集安の大王陵と同じく古韓尺の四十歩で造られたのではないかというのが、私の予測なのである。ちなみに、稲荷山古墳の墳長は一二〇メートルで古韓尺の七十五歩である。また、古韓尺のことで、むきになって書いてしまった。

歴史探究は連鎖である。次々に芋づるのようにつながっている。この蔓をいかに手繰って行くかが史遊の醍醐味である。古韓尺からちょっと離れて、豈の字に遊んでいても、また古韓尺に回帰するのが真に面白い。

●ユーラシア大陸における金属文化の発生と日本列島への伝播

中山 喬央たかじょう

まえおき

人類は二足歩行によりゴリラ・チンパンジーと分かれ、次いで火の使用と、道具の開発により独自の文化を形成し、今日に至っている。そして現存するホモ・サピエンスについては、大まかに石器時代、青銅器時代、鉄器時代という時代を経て、今日に至っていることは人口に膾炙されている。

一方、日本列島における文化の変遷は、土器の製作が開始された以降を縄文時代、北九州において灌漑稲作が行われるようになった後を弥生時代、大和で箸墓古墳が築造されてからを古墳時代と呼んでいるが、弥生時代・古墳時代の文化を支えた鉱山開発・金属製煉の開始といった初期金属文化発生への考察、研究は深求されないままであった。

今回はそのうちで、特に青銅器時代といわれている金属文化発生時の社会情勢につきユーラシ